

秘祭・玉蹴り相撲



玉子王子 著

一章 年に一度の秘密の祭り

神社。夜。あかりの下で、法被に禪という気合いの入った祭りの姿の子供らが鳥居をくぐって石段を上がる。山の中腹にある神社。息を切らして、やっと中腹にたどり着き、また鳥居をくぐる。

石段を上がり、鳥居をくぐる男児ら。

歩きながら、徐々に表情が変わる。

何かに気づいたような。しかし、はっきり考えられないような。

首をひねりつつ歩く男児らを、女兒たちが横目で見ながらニヤニヤしている。

「あは、思い出してきてるみたいね」

「一度私らもアレかけてほしいよね」

「かけるって言うか、結界？」

神社の境内。

明かりの元、同じ格好の人々が並ぶ。年齢はまちまちだが、大体は三〇以下。

五〇〇人ほどもいるが、ほぼ女だけ。男子は一〇歳になるかどうかの子らが二〇人ほどだけだ。

大人は女のみ。

大人はさすがに法被に禪という恰好ではない。股引は付けている。そのため、大人と子供が見ればわかる。股引ありの大人女子が三〇〇人ほどで、無しの子供らが二〇〇人位だ。子供といっても今年から参加の五歳幼女から来年から大人組に入る一八歳の女子校生までいろいろである。

「それでは、神挟祭を始めます」

巫女。

まだ二〇代中盤程度。

彼女をはじめとして、数人の神社の人間だけ巫女服である。年齢は同じぐらい。

歩き出す彼女らに、ぞろぞろと女たちがついていく。

少数の男児らは、周りの同級生の女兒たちと並んでついていく。

「ほら、こっちだよ」

「ん……」

女兒たちは覚えている。

毎年の祭りなのだ。男児らも覚えているはずだ。だが、不思議と覚えていない。

いや、正確には思い出してきている。

封じられた記憶が。

六郎が、首をひねる。

——なんだ……この祭りは、去年もその前もやったはずなのに、終わったあとには全然覚えてなかった……覚えてなかったはずなのに……何か、去年も同じように、この辺歩いたような、こんな暗

い中を……いや、歩いたんだろうな。覚えてないだけで。

薄暗い神社の境内を見回す。杉ではなく、ナラやブナなどが生えた原生林の山の中の平地を切り開いて建てられた神社。

ただの杉林でも夜に薄明かりで見れば妙な雰囲気があるだろう、まして雑多な種類の木が生えた原生林となると。

だが、別に六郎はそんなんことは気にしない。それどころではなかった。

——でもやっぱり全然覚えてないな。いや、ちょっと思い出してきた感じが……こんなふう歩いて……それで、何かすごく、怖い……というより、痛いことがあったような……ような気がする。キ〇タマ袋がキュッとしてきた。けど、帰るわけにもいかない。大事な祭りなんだし。そりゃ、本当に去年何かあったってんなら別だけど……でも、特に何かあった覚えもないし……

煮え切らない、不安そうだが、逃げようというほどのこともない、半端な気持ちを不思議に思いつつ歩く。

むしろ、楽し気な女兒たちに不思議な感覚を覚えつつ。

この宇佐美島は小中高、一つずつしか学校がない小さな島だ。同じ年の女兒たちは全員クラスメイト。

彼女らも不安そうなら六郎たち男児らもジワリと心の底から漏れ出してきた恐怖の記憶をもっとはっきり認識したかもしれない。

だが、女兒たちが平気な顔なので、根拠のよくわからない不安は薄れていく。祭りでなにかあったなら、女兒たちも不安なはずなのだから。

山の七合目辺りにある湧水の池から流れてくる小さな川。

それを跨いだ向こう側。木に囲まれた平地に柵が作られている。中でサッカーできるぐらいの広さの柵だ。その中に能楽でもやる演台のような建物があった。壁は無く、周りから見える板敷の演台に屋根が作られている。多少暴れられるぐらいの広さだ。

柵と演台を合わせて「蹴鞠の柵」と呼ばれていた。

その演台の上には檻が置かれていて、中には豚が一匹入っていた。

それに気づいて首をかしげる六郎。

——え、なんで豚が……

「はい、皆さんこれをご覧ください」

檻から豚を引き出す巫女たち。

「この豚はあらかじめ清められ、今日からの祭りのために用意されたものです。ここは神社とは先ほどの川で隔てられており、穢れを本殿に持ち込まないように考えられているわけですね。まあ、多くの方にとっては、いまさら説明するまでもありませんが……」

川で隔てられていることが、靈的には意味があることなのだろう。

というか、そういうことにしている。家畜、それもあまり綺麗とも思えない豚など儀式に使うのは珍しい。豚が飼われだしたのは最近のことだろうし。

「もともと、子牛を使っていたみたいですが、明治からはこんな感じで……」

割とどうでもいい感じの説明をする巫女。

その間に、他の巫女が準備を整える。

豚を観衆に尻を向ける形で台に乗せ、ベルトで縛って固定する。おとなしい豚。何か飲まされているようだ。

尻には布をかけられていて、足の間は見えない。

「それでは、準備も整ったようなので、さっそく開始の儀式をはじめましょう。さあ、子供たち、前に出て。あなたたちが主役なのよ。これからのこの島を背負っていくためのね」

青ざめつつも、周りの大人たちに促されるままに前が出る男児たち。クラスメイトの女兒たちも、彼らの横で最前列。今日の祭りは彼らの年代が主役なのだ。

柵の中は照明で割と見やすい状態だ。

演台の上の豚を見上げつつ、五〇〇人の女たちに半円に囲まれる六郎たち男児。

はっきりとは思い出していない。

それでも、不安が胸の底から湧き出してくるのを止められない。

——変だな、去年もその前も、この祭りで何かあった気がする。思い出せない。

前布がないタイプの禪の、大体が小ぶりの膨らみはキュンキュンに引き締まり、ニマニマと周りを囲む女兒たちの前とあまり変わらないありさまだ。

まあ実際には、ゼロである女兒たちの膨らみより万倍膨らんではいるのだが、男であるからにはもっと膨らんでいて当然、という目で見れば平らに見える事だろう。

経験浅い女兒たちにはよくわからなくとも、大人女子らにはお見通しだった。

「見て見てあの子たち」

「かわいいわねえ、前、縮むだけ縮んでるわ」

「形全然見えない」

「ほぼ女の子よー」

子供らを遠巻きにしながら肘で突き合いつつ、男の目もないので和気あいあいだ。

前は演台なので正面からは見えないが、そんなにきっちり一列でもないので横目で確認できる。

女子校生らも、男児らを見下ろしつつ小声で話す。

「よく来てくれるよね、この子たち。昔から思ってたけどさ」

「だから、男の子たちは祭り終わったら記憶が」

「そうそう、結界から出たら、男の記憶は消えるからね」

「恐怖だけは心の奥に残って……女の子に逆らおうと思うと、なぜかタマタマちゃんがキュキュッと縮むようになって……」

演台はそれほど高くない。子供らからもしっかり巫女たちと豚の姿が見える。

幼児らが前に並び、その後ろに子供、若い娘、三〇前の大人女子たちが並ぶと、巫女たちは儀式を開始する。

「それでは……これから私たち人間の、一番弱い部分を示すことで、神さまに対する尊敬の気持ちを表します。神様の前では私たち人間は弱い物だと示すことで、私たちの立場をはっきり自覚できるようにします。みんな、人間の体の中で、一番弱いところはどこかわかるかなー？」

巫女さんに聞かれて、男児らは困惑する。

——弱い部分って……目玉か？ いや、こういう場合、なんか……

六郎が思わず膝を締める。他の男児らもだった。

——こんな質問、女の人たちも答えにくいだろうし……どうい質問で……

考える六郎。他の男児らも似たようなものだが、彼の考えをよそに女兒たちは全く悩まず、目を輝かせて叫ぶ。

「キ〇タマで一す！」

「な、お、お前ら」

「私たち女にはないけど、こいつら男にはある一番弱いところ！」

「キ○タマキ○タマ、キ○タマで一す！」

叫び、自分の股間を叩いたり、指で二個リングを作ってみせる女兒たち。

ニヤニヤと、横の男児たちを見る。

思わず布一枚下の肉玉を庇う六郎。他の者もたちも同じだ。

見るや、指さす女兒たち。

「あは、タマタマガード！」

「みなさーん、こいつら金ちゃん防御してまーす！ 手で庇っちゃってまーす！」

「わかってるねえ、どこが一番弱いのか！」

はしゃぐ女兒たち。仰け反るように気圧されつつ、周りの年上の女たちをすがるように見る男児たち。

それに、ニンマリ笑い返す女たち。

「うふ、それほんと？ タマタマって、そんなに弱いのか？」

「お姉さんたち、ついてないからわからないの。教えてよ」

「い、いや、そんなこと……」

言いつつ、顔を赤らめる六郎。他の男児も同じだ。

怯えている、自分たちの急所を、それを持たない女たちに一方的にクローズアップされる状況に。怯えつつ、妙な恥ずかしさも感じている。

その姿を文字通り上から眺め、優越感を感じる女たち。

「うふふ、そんなこと……あるでしょ？ 知ってるよー、みんなが押さえてるその手の下、お股の間に、タマタマ二つとおチ○ポチン○ンが付いてること」

「そうそう、お姉さんたち、大人だからねー。知ってるのよ、みんなのお股が弱いこと。男の子の、大事な大事なミートボール、ミートボール」

大人の女たち。男児らかあみれば、中学生でも自分たちの倍ぐらいの年齢だ。

六郎たちは幼い、祭りに来るのもまだ三回目ぐらい。

その前二回の記憶が、おぼろげながら蘇りつつあった。

神社の神域に入った時から、徐々に戻りつつあるのだ。

だが、まだはっきりしたものではない。

思い出すまでなど、女たちはまたない。

「それでは、答えをみんなで言いましょう」

巫女さんが台の上で音頭をとる。

「人体で一番弱い部分は……」

目くばせ。

女たち全員に。

大人女子も、女兒たちも一斉に同じようにガニ股で足を開く。

そして平らな禪の前にリング二つを作り、叫ぶ。

「「「「キ○タマ！ キ○タマ！ 金の玉！ ついてないけど知っている！ 女はみんな知っている！ 男のここが弱いこと！ ぶらぶら二つ揺れている！ 金のボールが揺れている！ 知らないふりして知っている！ 女はみんな知っている！ 男のお股の肉ボール！ 臓物外にぶら下げて！ 今

日も男はデカイ顔！ だけど女は知っている！ 男のお股が弱い事！ 女はみんな知っている！
男の急所の金の玉！」」」」」



男の急所の金の玉！
女はみどんな知ってる！！
だけ外にぶら下げて！！
臓物のお股の肉ポ丨ル！！
男はみんないふりして知ってる！！
女は知らないふりして知ってる！！
知らないふりして知ってる！！
今日も男はデカイ顔！
男のお股が弱い事！

キキ〇タマ！
つ〇タマ！
女はみんないふりして知ってる！！
男のここが弱いこと！！
ぶらぶら二つ揺れている！！
金の玉！
知ってる！！
知ってる！！
知ってる！！

ぎゃははははは

歌うような鞆丸煽り。祝詞のごとき玉煽り。

女兒たちは多少詰まるが、中学以上はもう挨拶のようにすらすらと口にしていた。

それもそのはず、この島の女たちは五歳からこの祭りに参加し、男たちに隠れて練習しているのだ。

男たちが祭りを終えて神社から出ると記憶を失うのと違い、女たちは普通にすべてを覚えて——というか、外的要因で記憶を封じられずに——次の祭りに臨む。

男児は七歳からだが、女兒たちは五歳から参加。

大人たちの近くでたどたどしい舌つ足らずのロリ声で鞆丸煽りしつつ、心から残念そうだった。

「あー、早く私たちもやりたいなー」

「男の子は七歳からだからねえ」

「でも、祭りなんかなくても……喧嘩でキ〇タマ蹴ってるけどね」

「あら、頼もしいわね」

「いいわよ、今は薬で簡単に治るんだし、タマタマなんか蹴っ飛ばしちやいなさい」

この島の女たちは祭りに出る五歳から、年上の女たちに裏でみっちり男の急所への攻撃を仕込まれている。

祭りでさんざん見る急所をやられた男の弱さをしっかり認識している女児たちは、習った技術も相まって頭一つ二つ背の高い男子を金的で沈めることも珍しくない金的巧者に育っていく。

未来の金的巧者らが手を叩く。

「蹴っちゃえ蹴っちゃえ金の玉一、キ〇タマ蹴りは女の権利一」

「ぎゃはは！」

手を叩くロリたち。年下幼女らの言動にさえ縮むしかない六郎たち。

ガニ股丸しぐさだった巫女たちが特に恥ずかしがるでもなく足を延ばすと、他の女たちも姿勢を正す。

その慣れた様子に恐怖すら感じる男児たち。

その前で話す巫女。

「人体で一番弱いのはキ〇タマ。そのキ〇タマの弱さを、これから神の前で示します！」

正直言って意味不明の言動という気もするが、宗教的儀式などそんなものかもしれない。

ともかく、巫女が豚の布を取る。

「おおお！」

「でっかいキ〇タマー！」

「あんたらのとは大違いなんじゃない？」

「な、なにを……」

「はいはい、静粛に」

豚の足の間に垂れ下がる、巫女たちの拳より大きな肉の楕円球。

そのずっしりした巨玉を掌に載せ、重そうに持ち上げる巫女。

「はい、金の玉。大きいですね。ほんとご立派。皆のお股にも、コレ付いてるんですよ？ 一番弱い金ちゃんボール、男子の急所、これを……」

別の巫女が横から台を押してくる。

それに、巨玉を乗せる。

そしてさらに別の巫女が手渡す、ハンマーを。

「え」

「うそ……」

「さあ皆見ておいて、この豚ちゃんは私たち一〇人と綱引きしても勝っちゃうほど力があるの。そんな強い男の人を無力化する一番効率のいい方法が……こうやって！」

ハンマーを振り上げる。

振り下す。

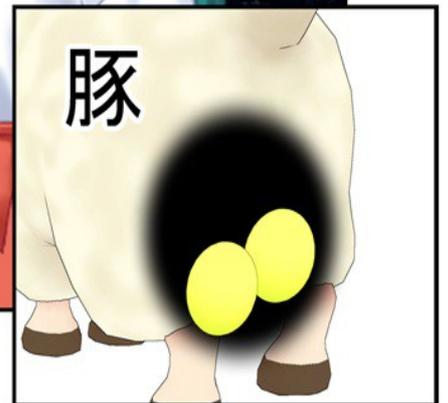
ビクンとのけぞり、足をピンと延ばす雄豚。

「金の玉を潰すことよっ！ ハンマーで一発、一発！ 一玉一発、二玉で二回で大事な大事なおキ〇タマ無事死亡という理屈よ！」

さあ皆見ておいて、この豚ちゃんは私たち一〇人と綱引きしても勝っちゃうほど力があるの。そんな強い男の人を無力化する一番効率のいい方法が……こうやって！

金の玉を潰すことよっ！

ハンマーで一発、一発！
一玉一発、二玉で二回で
大事な大事なおキ〇タマ
無事死亡という理屈よ！



目を血走らせる巫女。いや、その巫女だけではなく、周囲の手伝いの巫女も、豚玉を見上げる女たちも、一様に目を輝かせていた。

元雄豚は、叫ぶ余裕もなく、泡を吹いてぐったりとなる。

その姿を見て、手を叩く女たち。

「おー！」

「やったやったー！」

「神様、キ〇タマ奉げます！」

盛り上がる女たちと、縮み上がるしかない六郎たち。

目の前で潰された物を持っている者ともっていない者の圧倒的格差。

持っていない者は、奉げるだのなんだのと言っても所詮は自分が潰される可能性はゼロパーセントなので怯える必要などないのだ。

そんな股間無敵者に囲まれ、禪の前を押さえる男児たち。

「ひっ」

「そんな……二個とも……」

「はい、この通り、金の玉を二個とも神様に捧げました。この頑丈な豚ちゃんも、タマタマを潰されたら一瞬で気絶。タマタマがあるのは人間も同じ、これを示すことで、人間の弱さを示すという儀式……」

わけがわからないが、六郎をはじめとする男児らはそれどころではない。股を閉じ、股間を押さえずにはいられない。

女兒たちは大股開きで平然としたものだった。

横の知り合いを見てへらへらしている。

「あれれ？ どうしたの？」

「そこ押さえてるけど、何かあるのかな？」

「同じように潰されちゃうものが、あつたりするのかなー？」

「私らは全然関係ないよねー、ほらほら、まっ平」

「ああ、上も下のまっ平の出来損ないだもんなお前ら」

「へー？」

「そういうこと言うんだ……あはは、あとで可愛がってあげるからね」

「しっ」

「え、なんだよ後でって……」

記憶が抑制されていて、去年やその前のことを覚えていない男子たち。

その前で、巫女が豚の玉袋を引っ張る。

「はい、タマタマ袋はゼリー一袋に。潰れた金ちゃんかわいそうねー。かわいそうだから、神様に頼んで助けてもらおうね」

主に男児らに話しかけているので子供相手の話し方の巫女。

パンパン、と拍手を打つ。

打つと、手が光り始める。

「えっ!？」

驚愕する男児たち。女たちも声を上げるが、実質初めて見た男児らとは違う。

彼女らは毎年見ている。そろそろ卒業かと考えている三〇代中盤大人女子となれば五歳のころから三〇回近く見てきている、見慣れた奇跡の技だ。

手を空に掲げる巫女。夜だが、演台が一番明るく照らされている。

と、手筈通り周辺の電気が消される。

山の下の方の街や、本殿の光、そして巫女の手の光で照らされる演台周辺。

「えー？」

「何で光ってんだ？」

「奇跡ですよ、奇跡」

電気がつけられる。まだ手は光っている。

その手で、豚の肉袋を包む。すると、その手の中にずっしりとした肉の玉が再生される。

記憶操作同様の不可思議な術だ。神の力的なものだと言い伝えられているが、実際のところはよくわからない。ただ、こういうふうによればこういう力が発動する、というやり方だけが神社に伝わっている。

「はい、金ちゃん再生。ここの神様はね、女の人だから男の子のタマタマが大好きなのよ。大事なタマタマを潰れたままにはしておかないわ」

「なんだ今の!？」

「魔法？」

「忍術？」

「なんで忍術なんだよ」

「いや、医療忍術」

「っていうか神聖魔法？」

「巫女さんすげー！ 魔法使いじゃん！」

「いや、トリックだろトリック。俺は騙されねーぞ」

豚の睾丸再生など、ナノ薬を飲ませれば簡単に再現できる話だ。

ナノ薬が流通するまでは奇跡だと誰も疑わなかったが、技術の発展がトリックの可能性を生み出していた。

実際のところ、トリックではない。記憶操作と同じく神社に伝わる不思議な術だ。

記憶操作が神社の結界内で、一年のうちの特定の日——八月の一日か二日から二〇日程度。神社の御神体である鏡の色が徐々に変わり、その日を報せてくれる——しか使えないのと違い、力を溜めれば神社内でならいつでも使えるだけ汎用性が高いといえる。

ナノ薬がある現代ではあまり意味のない儀式だ。

だがそれが開発されるまでは、重要な意味のある儀式だった。

後で行われる男女対抗の格闘戦で睾丸が潰れても平気であることを示す重要な儀式だったのだ。

男子には潰れても大丈夫という安心を、女子には潰しても大丈夫という安心を。

それぞれもたらす重要な儀式だったのだ。

この奇跡の術があるため、この神社では睾丸が高確率で潰れるような儀式を長く続けてこれたのだ。

この術が無ければ、ナノ薬がない時代には容赦のない急所攻撃ありの格闘戦など危なくてできるものではないだろう。自分の息子を睾丸が潰れるかもしれない儀式に出す母親などまずいない、母の愛は深いのだ。

しかしあっさり治るとなれば、普通に出してくる。母親には当然睾丸がないので、潰れても治るなら過剰な同情も心配もない。

では父親はというと、当然祭りのはっきりした記憶がないので単に伝統の祭りと思って息子を送り出すだけだ。自分も散々同じ年の女子たちに睾丸を潰されまくったわけだが、覚えていない。ただ、心の底に女への恐怖が刻み込まれ、ふとした拍子に理由のわからない怯えのような形で出てくるだけだ。

豚が補助の巫女二人によって柵の外に連れていかれ、別の檻に入れられる。

「ご苦労様、明日もお願いね」

豚も男であるからには、神社から外に連れていけば祭りでの記憶は消え、明日も他の男児らの前で儀式を受けることとなる。

巨玉を揉みつつ、ぺしぺしと背中を撫でる補助の巫女。

「この時期のこの子はちょっと可哀そうよね」

「でもねえ、普通の雄豚は生まれてすぐ金の玉を抜かれて三か月ぐらいで肉にされるみたいだから、この子は超ラッキーよ。こーんな立派なタマタマぶら下げて、ちゃんと相手の雌と一緒に飼われてるの」

「じゃあこいつドリチン使用してんだ。一緒に生まれた豚が玉抜かれてそっこー肉にされたことを考えれば、超幸せ物だね」

「優しいよね真美のお母さん」

神社の主である真美の母は祭りの間は本殿で祈祷して記憶操作の結界がしっかり働くように気を入れている。

巫女がニコニコしながら豚の巨大睾丸を揉む。

「うふふ、大きい金ちゃんは揉みがいあって楽しいわね。彼氏のもこのぐらいなら……握り潰しがいもあるのにね。急所潰し！ きゅーしょ潰し！」

と、豚が鳴き声を上げる。怯えている。先ほど睾丸を叩き潰されたばかりなのだから怯えるのも当然だ。

しかし、少し不思議に感じる巫女。

——んー、なんか……握り潰すって言葉に反応した？ いやいや、豚なんだからわからないでしょそんなこと。

次の儀式に進む。

演台の上で、巫女真美が儀式を説明する。

「えー、次はね、みんなの穢れを断ち切る儀式を始めます。まず、男の子が演台に乗って。女の子、一人ずつ演台に上がって」

男子が演台に並び、見上げてくる女たちを見下ろす。

男子だけ上げてもらった状況に、少しいい気分だ。

が、女性優位の文化を保つための祭りで、男子をただ持ち上げるわけがない。理由はしっかりとあった。

それはそれとして、見上げる女たち。

法被は隠そうと思えば禪を隠せる長い物だが、男児らは禪は恥ずかしいと感じつつも、女兒のように「是が非でも見せないぞ」というほどの熱意をもって隠さない。というか、今はもう恥ずかしいなどと考えず、ただ棒立ちだ。

薄い禪であるから、見上げる女たちから見れば棒立ちというより**棒見せ**だ。

見せるほどないものが大半のはずだが、**女はみんな男根ソムリエ**、目ざとく形を把握する。

特に股引の大人女子は。

「ふむふむ、昨日の子らよりやっぱり一個上だけに平均的に見て育ってきてるね」

「あの子のごっついわあ。明らかに形が浮かんでる。もう大人以上の大きさじゃない？」

「去年から参加の小次郎くんよ。ねえ風魔さん」



風魔小次郎。気弱そうな男児に似合わぬ忍者のような名前だ。実際忍者の末裔である。先祖から伝わった精神感応能力の影響で、実は記憶操作が効いてない。

この島出身の母親がうなづく。

「はい、ちょっと大きすぎて恥ずかしがってるんで……あんまり言わないで上げてくださいね」

「あは、そうなんだ。小次郎くーん！ おっきいチン○ン禪からこぼれないように気を付けてねー！」

「え、うわっ」

「あの子、去年もすっごかったもんねえ」

「今年はさらに育ってるかな？」

「デ○チンショタってああいう気弱そうな子って相場が決まってるけど、あの子はデカすぎるよねえ」

顔を真っ赤にして法被で前を隠す小次郎。

周りの男児らも、見上げられていることに気づいて慌てて真似る。

——う、上に立たせてもらっても全然いいことないんじゃないか？

顔を赤らめつつ、やっと気づく六郎。

と、男児らが演台の奥に下げられる。

女兒の一人が巫女真美に呼ばれて上がってきて、男児の一人と前が出る。

「それでは、男の子と女の子、二人で並んで前を向いて」

真美に、巫女が道具を手渡す。

ハサミだ。

枝切りバサミのようなもの。作りは古い。何百年も使われてきているものだ。

刃は丸まっている、いや、元からつけられていない。儀式用の、切るためも物ではない。

「これより、穢れ断ちの儀式を開始します」

ハサミを天井に突き上げると、観客の女たちから拍手。

「おー！」

「切っちゃえ、穢れを！」

「ちょん切れちょん切れー！」

「穢れたものをチョキンしろ！」

女が「ちょん切れ」「チョキンしろ」などと叫んでいると妙に不安になる男子たち。さんざん股間に注意を向けさせられているということもあるが、やはりもともと「絶対切られたくない物がついている」者として、それを持たない者が「ちょん切る」などと発言することへの根源的な恐怖があるのか。

「それじゃ、二人とも、足を大きく開いて。儀式を始めるから動かないでね」

「え、なにを……」

「はいい！」

女子は経験済みなので、気楽なものだった。

二人の背後に巫女が立ち、禪に手をやる。

「え、ちょ……」

「はいはい、動かないでね。ほんとにちょん切っちゃうよー？」

二人の間に立つ巫女、振り返って男児を見て、にんまりしつつ自分の股間の前で巨大鋏をチョキンチョキンする。別に下を見て気を付けるとか、慎重にするという様子はない。

演台の他の男児らも唾をのむ。

六郎が禪の中が引き締まるのを感じる。

——うわ、平気でチョキチョキ。下も見ずに……内臓が外に出ていない整ったデザインの生き物としての貫禄か……俺なら絶対無理だ、下見ないと不安で……だって、挟んじゃったら……終わりだし。いや。ナノ薬で再生するんだけど……あ、さっきのトリックでも行けるのか。いや魔法かな？ ナノ薬有るんだからどっちでもいいけど。

膝を締める男児たち。

見上げる女兒たちが手を叩く。

「ぎゃははは！ 見て見て！」

「またお股閉じてるー！」

「守ってばっかり、キ〇タマ守ってばっかり！」

「今回は、ポコチンもでしょ！ ちょん切れたら終わりだもんねー！」

「別に無いなら無いで良くない？ 私らもないしさ」

笑われ、顔を赤くする男児たち。

何人かが唾を飛ばす。

「うるせークソマ○コ！」

「元からない出来損ないは黙ってる！」

周りの巫女たちがニコニコしつつ、誰が言ったのかしっかりメモしておく。

誰が女性蔑視発言をしたのか、ちらちらと禪の前、布に包まれた男性器を見つつメモしておく。

と、前に立つ二人の禪が外される。

二人とも毛の一本もない。

片やむっちりした縦筋。

片や引き締まってクルミのようになった肉袋と皮が主体のような小指の先。

同じように丸出しでも、注目は断然男児の方だ。というか、前にいるのは女ばかりなので、女児の縦筋などないも当然。

男児も前にいれば同級生の女児の股間に興味深々だっただろうが、彼らは後ろで背中しか見えない。法被なので尻も見えない。

というか、女児が前を気兼ねなく出せるように男児らの視線から隠している。

男児のほうはというと、島の若い女性ほぼ全員、五〇〇人近くに男性器をガン見される形だ。

これを小一、七歳から高校卒業まで毎年やられるのだ。祭りの記憶がほぼ消えるのが救いといえば救いだらう。

ここの男児らは三年生で、今年九歳の三回目だ。

「〇〇くん去年より大きくなってませんか？」

「あんまり変わりませんよ」

三〇少しまで女性らが出てくる。二〇位で産んだ場合、小学校卒業ぐらいまでは母親も大体来ている計算だ。

母親と近所の主婦らが自分の男の部分を見てガールズトークをするのを見て顔を真っ赤にする男児。

「なんだよ……あ」

「それじゃ、儀式を始めます。穢れをちょきーん！」

「ちょ、ま……」

「大丈夫、本当には切れない鉄だからね。それに、挟まないから……」

微笑みつつ、近づいて声を潜める。

「ってというか、君一、挟むほどおチン○ンないじゃなーい」

「な……はうっ」

しゃがみ、横からスツと鉄を股の間に突っ込み、閉じたまま慎重に上げて、ぐによつと男性器を押し潰す。

そしてかなり下げてから、チョキチョキと音を鳴らす真美。

口ではなんだかんだ、どうせ切れないし切れても大丈夫とからかうように言う。

しかし実際の行動としては慎重に、万が一にも挟んでしまわないように気を付ける優しい女性だ。

が、それでも男児は震え上がり、青ざめるというかほとんど白い顔になる。

「ひ、ひうううう」

女に股の間に鋏を突っ込まれ、チョキチョキやられる。

思わずつま先立ちになり、震える。縮むだけ縮んでいた玉竿がさらに縮み上がる。

女たちから歓声。

「きゃー、ビビってるビビってる！」

「大丈夫よ、切れない鋏だから！」

「巫女さんの力を見たでしょ？ もし切れちゃってもすぐ治してくれるよ！ 今なら薬でも一瞬だけどね！」

「っていうか、君の小さいのちよん切るなら普通のハサミで十分だからねー！ そんなでっかいのいないから！」

笑い転げる女たち。

震え上がる男児をよそに、今度は縦筋の下に鋏を持っていくが、女兒は特に何の反応も見せない。

むしろ太ももに当たらないようにガニ股になりさえする。

両手を頭の後ろに、縦筋を前に突き出す。

その縦筋に、ペンペンと閉じたハサミを当てる真美。男児に対するより遠慮がないというか、慎重さが無い。適当に叩いている。

それに女兒は何の文句もないし、見ている女たちからも何の反応もない。

ハサミを股間にあてられる、というシチュエーションが恐るべき脅迫になる者と、危ないといえど危ないがそんなに震え上がるほどでもない者の差。

切断の可能性がある者の余裕のない振る舞いと、切断の可能性の無い者の貫禄ある振舞い。

叩いた後、ハサミを下げる真美。

下でチョキチョキと鋏が音を立てる。男児の下でより勢いよく、音も強い。万が一にも挟むものがないので、真美も気楽なものだった。

「余裕ね！」

「堂々としてるわー！」

「さっすが、挟まれるものないと安心ねー」

「ポロリの可能性がある子たちとは違うよね」

「はい、お疲れ様」

真美が鋏を引くと、すぐに巫女が女兒の禪をつける。

つま先立ちでまだ震えている男児を見て、禪を持った巫女が唇を舐める。

——うふふ、かわいいなあ。鋏チョキチョキで、おチン○ン切られるの想像してビビっちゃったのね。男の子ってみんなそうだよ。男の子は意地っ張りだけど、おチン○ン関係だけは虚勢を張れない、だって下手に突っ張って去勢されちゃったら大変だもんねー。なんてね。っていうか、震えちゃって、可愛いわ。

「はい、大丈夫よ。もう終わりだからね」

ぎゅっと抱きしめる、片手で。片手は股間に伸ばし、縮み上がった股間を掌に収める。普段は島の外の大学に通っている巫女。柔らかい手に股間を包み込まれてようやく少し息をつける男児。

恥ずかしさより安心が勝る。

「お、お姉さん」

「大丈夫。穢れは切られたから、今年一年はきっと元気よ。っていうか坊や……」

声を潜める巫女。

「おチン○ン、結構大きいね？ お友達より立派じゃない？」

「な……」

「うふふ、それじゃ、コレ。ちゃんとつけるのよ」

禪を渡す。

女兒なら儀式が終われば男児らの目に絶対触れないようにさっさと禪をつけさせるのに、男児にはつけてといてねである。

すでに見られているからいいだろうという事だろうか。

それもあるが、実は奉納相撲の事も考えられている。

男女が組み合ったとき、万が一にも女子の禪が外れるわけにはいかないのでしっかりつける一方、男子のは外れたほうが面白いのであえて自分でつけさせる。

とはいえ「つけてくれ」といわれれば巫女たちはちゃんとつけてやるのだ。あくまでも男女を公平に扱いつつも、体の構造の差で結果に差が出る、という形が望まれる祭りの形なのだ。

しかし、あとで相撲があることを知らない男児らは、わざわざ巫女を呼び止めてつけてもらおうとはしない。それも計算してのそっけない態度だ。

公平といっても、進んで差をつけないだけで、差ができるように立ち回りはする。

所詮は、女性優位のこの島の文化を作り、保っていた祭りなのだ。

ともあれ、フルチンで仲間の横に戻りつつ、慣れない手つきで禪をつける男児。

次の二人が前にでる。

同じように立たされるが、なにをされるのか知っている男児は抵抗する。

「や、ヤダよこんなの」

「頑張るのよ○×くん！」

下から声を上げるのは、近所の主婦。

周りも声を上げる。

「頑張れ頑張れ！ 男の子でしょ！ チン○ン見せるぐらい気にしちゃだめよ！」

「あ、それとも鉄？ 大丈夫、挟まないから！」

「ポロリしても治るから大丈夫よ！」

囃し立てる女たち。

もちろんそれで儀式に喜んで参加する気になるわけもない。

その男児に巫女二人がしがみつき、禪をはぎ取る。

「あ、ちよっ」

「出た出た！」

「かわいいおチン○ンよー！」

「ふううう」

顔を真っ赤にする男児。

「足開かせて、ほ」

真美が足の上に鉄を差し込む。

「ひふううう！ はうっ！」

ギュ、と押し付けられる鉄。ひんやりした鉄の感触が肉袋に伝わり、さらに縮む。
すぐに下げて、動かす真美。

「はい、穢れをチョコキチョコキ……大丈夫大丈夫」

「ひ、ひ」

震える。足を閉じたいが、鉄を差し込まれた状態で閉じるわけにもいかない。
かといって女兒のように堂々ガニ股などありえない。
指さす女たち。

「見て見て、あの半端な足」

「鉄を入れられちゃ閉じられないけど、開くこともできない。つくものついてるオトコノコは悩ましいねー、ぶーらぶらで玉キュンキューン」

「っていうか、あの位置でチョコキチョコキされても絶対タマチン届かないじゃんねー。いや、届く奴もいるけど」

「小次郎くんね。去年でも、アレに届くぐらい立派だったもんね」

「いるのよね、ああいうデ○チンショタっ子」

小次郎。

椎名六郎の隣にいる風魔小次郎という忍者のような名前の男児。他の男児と違い、神社に来る前にすでに青ざめ、震えていた。

彼は覚えていた。

去年もその前も、この祭りに参加したことは他の男児も覚えているが、内容も内容は不思議な力に封じ込められていた。

しかし、去年この島に引っ越してきて参加した小次郎は、その内容も覚えている。

覚えていたが、何かを感じ、親に言う事もなく黙っていた。

まあ、とりあえず今のところはどうでもいい話である。

——ああ、やだ、ヤダよ……これも嫌だけど、この後の……奉納古代相撲が嫌だ……

奉納古代相撲、なんだかんだ妙な名前だが、要は金的有りの男女の格闘戦だ。

女の子と金的有りルールなど、一方的に男が不利になるだけでやりたがるものなどいない。女兒たちはこの奉納相撲のための訓練もしているとなればなおさらだ。

しかし、先祖から受け継いだ血によって記憶操作が効いていないとはいえただの子供でしかない小次郎には何もできることはなかった。

体験版、終わり

続きは製品版でぜひお楽しみください